

## フェアプレイ／戦争／ピーター・パン ——『ピーターとウェンディ』における帝国主義と ブルジョア・イデオロギーの崩壊——

岩井 学

ピーター・パンは常にフェアであることを信条とする。しかしフェアプレイへのこだわりはこの永遠の少年に特有なものではなく、20世紀初頭のイギリスに広く浸透していた。というのも大英帝国衰退のさなか、フェアプレイの精神は愛国主義、そして帝国主義を押し進めるイデオロギーへとつながっていくからである。ピーター・パンは、大人になりたがらない子どもという、時代を超えたある種の原型とみなされることが多いが、彼の存在には20世紀初頭の時代状況が色濃く刻印されているのである。本稿では、大英帝国の衰亡を目の当たりにしていた20世紀初頭英国の上流、中産階級の抱いていた不安や焦り、そこから生まれた愛国主義的イデオロギー、そしてそれを流布させる装置として機能した当時の教育、といったものからテキストを読み解き、ピーター・パンとその仲間の少年たちを描くことが当時のイギリスでどのような意味を持ちえたのか、そしてこの小説全体には当時の閉塞感がどのような形で現れているのか分析してみたい。

キーワード： ピーター・パン、J・M・バリー、大英帝国、帝国主義、フェアプレイの精神

「おやおや」とホームズは同情して言った。「マック警部、そしてあなた、ホワイト・メイスン主任、あなた方にとっても重要なアドバイスを一つ差し上げましょう。……申し上げたとおり、わたしはあなた方に対してはフェアに正々堂々振る舞おうと思っています。あなた方が不毛な捜査にエネルギーを浪費しているのを黙って見ているのはフェアな振る舞いだとはわたしには思えないのです。」  
アーサー・コナン・ドイル『恐怖の谷』

この言葉こそ、年月経ようと  
彼の地に学び舎あるかぎり  
学徒たちの耳にせざることなく  
一度聞けば忘れることのなき言葉。  
これを炎の燃ゆる松明のごと  
高鳴る胸に生涯刻み  
地に倒れんとも後に続く者たちに投げ与える —  
「がんばれ、がんばれ、正々堂々戦おう！」

ヘンリー・ニューボルト「生命の灯」

「わたしが提唱したい方法はですね、宣伝家たちが『直接暗示』と確か呼んでいるものでして、何度も繰り返すことによってある考えをインプットさせようというものです。……この方法は先の戦争でも、高い効果を発揮したプロパガンダには必ず使われていたものです。」

P・G・ウッドハウス『比類なきジープズ』

### 序：フェアプレイの精神と20世紀初頭の イギリス社会

ピーター・パンは正義の味方よろしく、常にフェア

プレイの精神を忘れない。自分の仲間ではない「レッド・スキーン」のタイガー・リリーが二人の海賊に捉えられているのを目撃した時もその子を救出しようとするが、それは彼女のことを心配したからで

はなく、二人で一人の女性を相手にするというアンフェアなやり方が許せなかったからである。「ピーターはウェンディほどにはタイガー・リリーのことを気の毒に思っていないでして。彼が許せなかったのは、二人で一人を相手にしていることで、それでピーターは彼女を助けることにしたのです」(PW 143)。<sup>1)</sup> 彼はまた自分が聞きたくない話でも、フェアプレイの精神を尊び、相手に話す権利を認める。「『おい、もう少し静かにしろ』ピーターは声を上げました。どんなにひどい話だと自分には思えても、話す機会をウェンディにもフェアに与えるべきとの信念を持っていたのです」(PW 164)。

これは彼が戦いに挑む時の姿勢にも現れており、あくまで正々堂々と戦うことを誓い、一对一の勝負にこだわる。敵が寝ているときに不意打ちをかけたりはしない。海賊が寝ていれば、「『おれはまずそいつを起こして、それから殺すんだ』」(PW 107)。フックが剣を落とし窮地に陥ったときでも、ピーターは相手の不利な状況を利用してとどめを刺したりはせず、まずはその剣を相手に拾わせる。ピーター・パンのフックに対する時の姿勢は、決闘でありまたフェンシングであり、ルールとフェアプレイの精神に則ったスポーツそのものである。

『ピーターとウェンディ』のなかでスポーツを連想させるものは、ピーターとフック二人の戦いだけではない。ゲーム／試合／勝負／遊びのイメージはテキスト全体に広がっている。物語は庭で「遊んでいる」ウェンディで幕を開け、その母親は「遊びのように」家計簿をつけている (PW 69, 70)。ネバーランドの子どもたちは海賊との勝負だけでなく様々な遊びに熱中し、人魚は虹をゴールにした試合に興じ、フックは若かりし日のフットボールの試合を思い出す。そしてスポーツで要求されるフェアプレイの精神は、登場人物たちの行動の判断基準として、テキスト内のほとんどすべての事象を規定している。このモチーフは、ピーター・パン登場以前のダーリング一家のひと騒動の場面にもすでに描かれている。ダーリング家の家長、ジョージ・ダーリング氏は息子のマイケルに薬を飲ませるために、自分も別の薬を同時に飲むはめに陥るが、そのときこの父親は二人の薬の量が異なるのはフェアではないと言い張る。「『問題は、お父さんのコップに入っている薬のほうが、マイケルのスプーンの方より多いということだ。……これはフェアじゃないぞ。た

とえ命を落とす間際になっても言い張るぞ、これはフェアじゃない』」(PW 84)。しかしこのように主張していた父親が、同時に飲むと言って自分だけ飲まず、そのアンフェアな振る舞いで子どもたちの鞆をかう。またネバーランドでは、ピーターと少年たちがシンデレラの物語をウェンディにせがむが、『小さな白い鳥』に登場する常に道徳心を忘れない乳母アイリーンによれば、このおとぎ話は、「正直に、嘘をつかずまじめに生きてきたことのご褒美」、つまり人生の公正な報いを受ける物語である (LWB 125)。

さらにフェアプレイの精神は語り手によっても繰り返し言及される。ピーターの数々の冒険のなかからどれを取り上げるかいったん決めたかぎりは、初めのルール通りその物語をするのが公正なやり方だという。「わたしはコインを投げて、沼の話をすることに決めました。しかしそうすると逆に峡谷の話かケーキの話、ティンクの葉っぱの話のほうがよかったように思えてくるものです。……しかしながら、沼の話をするのがやはり一番フェアなやり方でしょう」(PW 139)。また箱を紐で縛ろうと思ったときに思い通りにうまく縛れないと我々はつい箱を蹴飛ばしてしまうが、語り手によれば、「公正さを期すためには、紐を蹴るべきである」(PW 179)。またそれだけでなく、同じ“fair”という単語が、やや唐突にも一度ならず別の意味に用いられる。「このようなお話でした、そして子どもたちは、その美しい語り手 [ウェンディ] と同じように喜びました」(PW 166)。以上のようにこのテキストは執拗に「フェア」に固執し、主人公であるピーター・パン自身の性質のみならず、ピーターとも戦いとも関係のないことに関しても、また意味を変えてまでも、繰り返しフェアプレイの精神に言及する。

フェアプレイへの固執はこのテキストに特有の現象ではない。例えば、戯曲『ピーター・パン』が上演される前年の1903年にコナン・ドイルによって書かれた「空家の冒険」のなかで、シャーロック・ホームズとモリアーティ教授との最後の戦いの場面はホームズ自身によって次のように描写される。

谷から出る狭い小道に、今は亡きモリアーティ教授のいささか不気味な姿が立っているのを見たときには、自分の人生も間違いなくこれで終わりだと思ったよ。彼の目には並々ならぬ決意

の色が浮かんでいたのだ。わたしは教授と二三言ことばを交わし、君が後で受け取ることになる短い手紙を書くことを寛大にも許してもらった。わたしはそれをタバコの箱と杖と一緒にそこに残し、小道を歩いていった。モリアーティはわたしのすぐ後ろをついてきていた。そして行き止まりになりこれ以上進めなくなった。彼は武器を使ったりはせず、わたしに飛びかかってきて長い腕をわたしに巻きつけてきた。彼もこれが自分自身の最後の勝負だということを知っていて、自分の復讐のみに執念を燃やしていたのだ。(Doyle 9)

悪の秘密組織を牛耳るモリアーティですら、フェアプレイの精神を発揮し、ホームズに対して一対一で勝負に挑み(見張り役の手下もいるが加勢しない)、探偵もひるむことなくその挑戦を受ける。20世紀初頭の英国社会には、フェアプレイの精神を賞賛する気運が高まっていたのであり、当時のイギリス人の精神構造の一端をここにかいま見ることができる。

ピーター・パンという永遠の少年は、1902年の『小さな白い鳥』のなかで初めて登場する。しかしこの物語でのピーターは、独身で退役軍人の語り手がデイヴィッドという少年に語ってあげるケンジントン公園のお話のなかに出てくる脇役にすぎない。ピーター・パンが主人公として登場するのはその2年後に書かれた戯曲『ピーター・パン』においてであり、ネバーランドでの冒険やフック船長との戦いというよく知られた筋書きが展開される。1911年にこの芝居が作者のJ・M・バリ―自身によって小説化され、『ピーターとウェンディ』として出版された。『ピーター・パン』および『ピーターとウェンディ』に登場するピーター・パンはネバーランドに住み、成長しない永遠の少年である。彼はウェンディに誘われても、現実世界に移り住んで普通の子どもとなり、大人へと成長していくことを拒む。このためピーター・パンは大人になりたがらない子どもという、ある普遍的なキャラクターとして捉えられ、精神分析的あるいは心理学的な観点からの分析の対象となってきた。<sup>2)</sup> この手法による分析も含め、作者と主人公はしばしば同一視される。確かにバリ―とピーター・パンには共通点が多い。バリ―は少年のように甲高い声で背も低く、通常の男女関係



図1 40代のバリ―とナナのモデル、ルアス。Birkin, 111頁より。

を結ばず少年に傾倒し、英国社会にとけ込めず孤独のうちに人生を終えた(図1)。このため作者の伝記的事実から作品にアプローチする手法もこのテキストにあっては常套的なものである。<sup>3)</sup>

しかしながら、フェアプレイの精神というピーター・パンのなかに繰り返し言及される概念一つをとってみても、あるいは母親を知らない子どもたちの国ネバーランドと、ヴィクトリア女王という偉大な母親を失った20世紀初頭のイギリス社会を併置してみれば想像がつくように、この物語はそれが生み出された時代を色濃く映し出しているのであり、ピーター・パンを時代を超えたある種の原型と捉えてしまうと多くのものを見失う。<sup>4)</sup> 本稿では、大英帝国の衰亡を目の当たりにしていた20世紀初頭英国の上流、中産階級の抱いていた不安や焦り、そこから生まれた愛国的イデオロギー、そしてそれを流布させる装置として機能した当時の教育、といっ

たものからテキストを読み解き、ピーター・パンとその仲間の少年たちを描くことが当時のイギリスでどのような意味を持ちえたのか、そしてこの小説全体には当時の閉塞感がどのような形で現れているのか論じてみたい。

20世紀初頭に脚光を浴びたフェアプレイの精神は、もともとはイギリスのスポーツ競技にみられる特徴であり、同時にそれを楽しむイギリス人自身の特徴でもある（と少なくとも彼らは考えている）。例えばサックヴィル＝ウェストは「イートン校出身の若い紳士と村の鍛冶屋の息子が村のクリケット場で同じ条件で相対することのできるスポーツ」、つまり誰でも公平に競い合うことのできるスポーツによって、「イギリス人の性格のある基本的特徴がくっきりと浮かび上がってくる」と述べている。そして「フェアプレイの精神、チーム・スピリット、勝ちにも驕らぬ心……といった人格の形成」を促すスポーツを愛することと、国家の性格の形成とは少なからず関係していると論じる（Sackville-West 409-10）。スポーツの際に発揮されるフェアプレイの精神は、イギリス人にとっての誇りであり（一部の階級の）アイデンティティの源である。

このフェアプレイの精神が盛んに取り上げられた20世紀初頭とは、大英帝国衰退の焦りと不安が人々のあいだに広まった時期である。1890年代に入りアメリカ、ドイツが台頭する一方、イギリスの経済的・政治的影響力は目に見えて落ちていき、栄華を誇ったヴィクトリア時代も終わりを迎えるという予感が社会に広がった。このようななかでイギリスは、ヴィクトリア時代の「榮譽ある孤立」を放棄し、植民地をめぐる列強との争いに踏み込まざるをえなくなる。国内では19世紀末から一部の勝ち組企業が金融資本を独占し巨大化する一方、下層中産階級の凋落と労働者階級の増大が社会問題となっていた。都市部にはスラムが形成されていき、これら貧困層が大英帝国衰退の元凶とされた。そしてボーア戦争（1899-1902）での思わぬ苦戦により、イギリス兵として従軍した労働者階級の若者たちの体力の低下が問題視され、イギリス人の「人種退化」が現実味を増して語られるようになる。

このような大英帝国の威信の失墜のさなかであって、フェアプレイの精神は、イギリス人としてのアイデンティティおよび愛国心を高め、帝国主義戦争

を後押しするためのイデオロギーとして機能することになる。イギリスのスポーツが信条としていたフェアプレイの精神は、そのまま戦争を戦う際の姿勢として適用された。そのことは、例えばシャーロック・ホームズの作者コナン・ドイルのボーア戦争観に明らかである。<sup>5)</sup> スポーツと戦争を重ね合わせて論ずることはイギリスでは古くからおこなわれていたが、その結びつきは19世紀末からいっそう強化された。例えば20世紀初頭にはスポーツと戦争によって強壮な身体を造ることが人種退化をくい止めるための方策と考えられるようになった。またこの時期特に上流、中産階級の新聞において戦争を「決闘」「フェンシング」で喩えることにより、戦争がルールと伝統に則ったジェントルマン的スポーツであるとのイメージが流布された。そしてスポーツによって身につけることのできる忍耐力、自制心、団結力は、戦争に勝つために必要な要素とされた。ハロー校の当時の校長は次のように語っている。

勇気、気力、忍耐力、落ち着き、自制心、規律、協調、団結心、これらはクリケットやフットボールでの成功の鍵であるが、これらの性質はまた、平和な時であっても戦争時であっても、我々を勝利へと導く資質でもあるのだ。これらの資質を兼ね備えた男たちが……ブラッシー[インド北東部]やケベックを征服したのだ。大英帝国の歴史において、イギリスの支配力はそのスポーツに負っていると記録されているのである。（Welldon 329）

このようにフェアプレイの精神やチーム・スピリットといった語彙は国家と帝国を語る際の言説のなかで使われるようになり、スポーツ-愛国主義-戦争と連なるイメージの連鎖は20世紀に入り強固に形作られていった。

このような時代において、イギリスのエリートが集まるパブリック・スクールが、帝国主義に奉仕する人材育成のための教育に向かっていくのは歴史の必然のように見える。知性を育むよりも人格の陶冶に力点が置かれるようになっていき、上流階級の若者に力、勇気、高潔さといった徳目が教え込まれ、また愛国心が人間のもっとも高貴な感情であるとして教育された。その結果パブリック・スクールは「軍国主義の中心」となり、そこで教育を受けた若

者たちが植民地をめぐる他国との争いでの中心的役割を果たすことが期待されるようになる (Wilkinson 70)。1885年のスーダン、ハルツームでのマフディーの反乱軍との戦い<sup>6)</sup>を題材にしたヘンリー・ニューボルトの詩「生命の灯」(1897)で「プレイ・アップがんばれ、プレイ・ザ・ゲームがんばれ、正々堂々戦おう！」と各スタンザの最後で繰り返されるように、パブリック・スクールで培った精神は戦争で発揮されることが期待された。また1906年の「パブリック・スクールと公共性」と題された文章には、パブリック・スクールのエリートの役割が次のように説明されている。

英国のパブリック・スクールを卒業した多くの青年たちは……金には換えられぬものを身につけて巣立っていく。すなわちまっすぐな性質、ごまかしや卑劣さを蔑む心 [i.e. フェアプレイの精神]、命令に服する習慣、そして恐れを知らぬ勇気である。これらを身につけて世界へと羽ばたいていき、大地を征服し、その地の未開な種族を支配し、そして帝国を築き上げるという男としての責務を遂行するのである……。(Papillon 283)

ここにあるように、パブリック・スクールでの教育とは、善良なる市民になるためのフェアプレイの精神を教えるだけでなく、愛国主義および帝国主義的侵略戦争を遂行するためのイデオロギーを教え込むものであり、それはとりもなおさずイートン校出身であるトマス・アーン作曲の「ル・ブル・ブリタニアブリタニアよ、統治せよ」を実現させるためのものに他ならない。国家のイデオロギー装置たるパブリック・スクールでこのような教育を受け、イギリス人としてのフェアプレイの精神を身につけたエリートたちは、植民地をめぐる他国との争いに飛び込んでいったのである。<sup>7)</sup>

## I. ネバーランド帝国のピーター・パンと子どもたち

このことを念頭に置いてテキストを読んでもみると、『ピーターとウェンディ』のなかにも、帝国主義や戦争へのアリュージョン、比喩、あるいはあからさまな描写がちりばめられていることに気づく。その冒頭部分、ダーリング氏と夫人の結婚に至るいきさつを語り手が語る場面に既にその兆候があらわれて

いる。ここではジョージ・ダーリングが他のライバルに先んじて彼女を「勝ち取った」方法が紹介されるが、氏も結局夫人のすべてを征服できず、ダーリング夫人は「ナポレオン」が挑んでも難攻不落であると語られる (PW 69)。またこの夫人も、子どもたちの心に描かれた「地図」を見ながら心の中のネバーランドという島を「搜索」する (PW 73)。このように帝国主義的語彙は、日常生活を語るナラティブにも浸透しているのである。

舞台がネバーランドに移ると、テキスト内の帝国主義的言及はあからさまになる。植民地を連想させるアメリカ先住民の部族名や「サトウキビ」などの語彙が使われる。その先住民たちは被征服者としてピーターにかしずき、またピーターも植民地の人々が怠けないよう、鋭い目を光らせる。「しかしピーターは怠惰を嫌うので、彼が帰ってくると、島の住人たちは皆、また活動を始めるのでした……」(PW 112)。そしてネバーランドに対してダーリング家の子どもたちが住んでいたイギリスは「本土」と繰り返し表現される。<sup>8)</sup>

ダーリング家の子どもたちが、ピーター・パンに連れられネバーランドに初めて足を踏み入れる場面は、原住民の抵抗を受けながらも未開の土地に上陸する植民者の姿と重なり合う。「彼らは今、恐ろしい島にやってきたのでした。……視界に恐ろしいものは見えませんでした、苦勞して、少しずつやっとなんでいくというありさまでした。まさに敵意を抱いた敵兵の中を分け入って進んでいるようでした。……『奴らおれたちを上陸させたくないんだ』とピーターは説明しました」(PW 106-07)。結局ピーターとその仲間たちは、ネバーランドの支配者として君臨する。

このテキストでは、先住民に対し白人が支配するというヒエラルキーが当然のものとして受け入れられている。植民地のこの階層関係が「しあわせな家庭」と題された章に提示されている。先住民たちは白人に喜んで仕え、ピーターと子どもたちの家を昼夜問わず見張る。

彼らは一晩中地面の上に座って地下の家の見張りをし、海賊たちの大規模な襲撃に備えていました。……

彼らはピーターのことを偉大な白人の父と呼び、彼の前にひれ伏していたのです。ピーター

はこれをととても気に入っていました。……

彼らが自分の足下にひれ伏している時など、ピーターはととても尊大な様子で言ったものでした、「偉大な白人の父は、黒んぼ族の戦士たちが小屋を海賊から守ってくれて、喜んでおるぞ。」

「わたし、タイガー・リリー」と、そのかわいらしい子は答えました。「ピーター・パンわたし助ける、わたし、彼のとてもよい友達。わたし、海賊に彼やられないする。」

彼女はととてもかわいかったので、こんなにへつらう必要はなかったのですが、ピーターは自分がそれにふさわしいと考えていました。そして目下に言うように言ったものです、「もうよい、ピーター・パンの話は以上じゃ。」(PW 157)

ピーターたちの「しあわせな家庭」は、タイガー・リリーたちの見張りによって成り立つのであり、白人支配者たちは植民地の先住民を搾取し、その恩恵にあずかるという帝国主義の構図が暗示されている。

この入植者たちには、愛国心が立派に根付いている。彼らは海賊たちにおだてられ一味に加わることも考えるが、愛国心がそれを阻む。

「それでもまだ僕たちは、国王の忠実な臣下でいられるんですか」とジョンが聞きました。

フックが忌ま忌ましそうに答えました、「『王を打倒せよ』と言って誓わねばならぬぞ。」

おそらくこれまでのジョンはあまり褒められたものではありませんでしたが、今回は立派に振る舞いました。

「それなら断る」と彼は叫び、フックの目の前の樽を蹴りました。

「ほくも断る」とマイケルが叫びました。

「ブリタニアよ、統治せよ」とカーリーが甲高い声で言いました。(PW 191-92)

社会が若者たちに望んだこと、それは国家のために立派に戦うことである。少年たちが海賊たちに殺されそうになった時、ウェンディは叫ぶ。「みんなに本当のお母さんたちからこんなメッセージが届いているように思うの、『息子たちには英国紳士として死んでいくように願っています』」(PW 192)。国家

のためには死をも厭わず、むしろそれを賛美するこの態度こそ、フェアプレイの精神に則った愛国教育が目指したものである。もちろんピーター・パンも死など恐れはしない。正義感に貫かれ、先住民たちを支配するピーター・パンは、人魚の沼でのフックとの戦いの後、一人傷ついたまま取り残され、死を目の前にする。そのとき彼は不敵な笑みを浮かべ、心の中で叫ぶ、「死ぬことは、きっと大きな冒険なんだ」(PW 152)。<sup>9)</sup> このように、ピーター・パンと仲間の子どもたちは、フェアプレイの精神を身につけ、愛国心を持った若者たちである。彼らが19世紀末から20世紀初頭においてイギリス社会が作り上げようとした若者たちと合致することは、先に引用した「パブリック・スクールと公共性」と読み比べてみれば明らかである。以上のように、ピーター・パンとその仲間たちには、大英帝国の帝国主義政策を押し進め、ルール・ブリタニアをふたたび実現させるために、当時の英国社会が求めていた若者像が投影されているのである。

ここでさらに注目すべきは、彼らの出自である。ネバーランドの少年たちは、ピーターの説明によれば、「『乳母がよそ見していたときに乳母車から落っこちてしまった子どもたちなんだ。七日以内に問い合わせがないと、費用がかかるからネバーランドへ送られちゃうんだ』」(PW 94-95)。「乳母がよそ見していたときに」という表現を文字通り受け取るとしても、その後一週間も届け出がないということが意味しているのは、その子たちはほとんど捨て子同然の存在だということである。つまりネバーランドで冒険をする、親の愛を十分に受けずに育つことを余儀なくされた少年たちは、下層階級を想起させる存在なのである。

これに対し、ピーターに連れられてやってくるダーリング家の子どもたちは、親の愛という点ではネバーランドの迷い子たちとは正反対の存在であるように見える。しかし経済状態では大差ない。ダーリング家では、子どもが生まれると養っていきけるかが大問題となり、そのたびにダーリング氏は頭をぬれタオルで冷やしながら費用の捻出に頭を悩ませる。結局「ミルク代がかさみ貧乏になってしまったので」ケンジントン公園で拾ってきたニューファンドランド犬を乳母にする (PW 71)。さらに物語の大団円近く、ネバーランドの迷い子たちをダーリング家で養うことになったとき、この家には居間がない

ことが判明する。「『じゃあ、リーダーの後に付いてこい』とダーリング氏は陽気に言いました。『言っとくけど、居間があるかどうかは保証しないよ。でもある振りをしてるんだよ……』」(PW 216)。以上のように、ネバーランドで活躍する子どもたちは、下層中産階級もしくは労働者階級の出身なのである。

このテキストが生み出された当時の時代状況と重ね合わせてみると、この設定の意味が浮かび上がってくる。彼らの存在は、金融資本の肥大化や植民地獲得競争への参戦によりイギリス国内で19世紀末からプロレタリアートの増大と下層中産階級の凋落が社会問題となっていたという歴史的事実を反映している。貧困層の拡大、ボア戦争での苦戦などにより下層階級の退化が不安視されるなか、労働者階級の若者たちが愛国の精神にあふれ立派に戦う姿を描くことで、『ピーターとウェンディ』は、大英帝国の将来に危惧を抱いていた当時の上流、中産階級の懸念を払拭する、願望充足的なテキストとなる。このようにこのファンタジーは、当時のイギリスの支配層のイデオロギーと密接に結びつき、帝国主義戦争を遂行するためのイデオロギー装置として作動するフェアプレイの精神を執拗に繰り返し、植民地主義を肯定する言説を振りまいていく。

帝国主義を肯定する言説としてもっとも強いインパクトを持つのが、海賊とインディアンとの戦いの場面であろう。第12章はフック率いる海賊たちとインディアンとの戦いの場面で幕を開ける。この章は帝国主義的色合いが真っ黒く映し出されている。というのもフックとインディアンとの戦いは、その冒頭から、白人植民者と先住民との戦いに奇妙にもすり替えられるのだ。第12章は次のように始まる。

海賊たちの攻撃は、完全なる奇襲でした。悪辣なフックが指揮をしてあるまじき行為に出たことの確かな証拠です。というのも、フェアなやり方でインディアンたちに奇襲をかけるという考えは、この白人には毛頭なかったのです。

戦争に関する野蛮人の不文律によれば、攻撃をするのは常にインディアンの方で、その種族の策略によって夜明けの直前にそれは敢行されることになっています。その時間帯が白人たちの士気をもっとも下がる時だと知っているからです。白人たちはといえば、そのころには、彼

方の起伏にとんだ地面の頂の、柵で囲った粗末な陣地に陣取っているのです……。 (PW 173)

以下続けてファンタジーとはとても思えない緊迫感でもって、冒険小説やルポルタージュにありがちなステレオタイプの言説をなぞっていく。

フェアプレイの精神を体現するピーター・パンとは対照的に、フック率いる海賊たちは、ピーター・パンの側についてインディアンたちに対しアンフェアな奇襲攻撃をかけ、勝利を収める。奇襲を受け、怯えて逃げ惑うインディアンたちの描写は哀れを誘う。しかしながら語り手は、フックのこの行為に対して必ずしも批判的ではない。敵を倒すか、さもなければ自分がやられるか、という二者択一に直面したときには、アンフェアな手を使うこともやむを得ない場合があると語り手はほのめかす。

このときフックがとった戦略に対して、彼がどの程度責めを負うべきか、といったことは歴史家が決めるべきことです。例の時間まで丘の上で待っていたとしたら、フックとその仲間たちはおそらく皆殺しにされてしまったことでしょう。フックを裁くときには、この点も考慮しなければフェアとはいえません。彼がすべきだったのは、自分が新しい戦法を使おうとしているということを敵に知らせておくことだったかもしれません。その一方で、そのようなことをすれば、奇襲という要素を台無しにしてしまい、その戦略は意味がなくなってしまいます。このように、この問題には様々な難しい点が付随しています。しかし少なくとも、そのような大胆な作戦を考えついた知性、そしてそれを実行した残忍な天賦の才に対して、不本意ながらも感嘆の念を抱かずにはられません。(PW 175-76)

さらにこの戦いの場面のインディアンたちの表象には、「悪魔的な狡猾さ」、「文明人なら驚きまた同時に絶望するような鋭い感覚」、「彼らにとっては男らしさの神髄であるのろまな態度」といったような当時の紋切り型が用いられている (PW 174)。また、白人の前で驚くところを見せては行けないという、迷信深い「この種族の因習」が自らの破滅を招き寄せたことも語られる (PW 175)。このように、ここ

ではフックを白人に重ね合わせ、インディアンを危険で劣った先住民というステレオタイプで表象し、フック＝白人の「戦いというよりもむしろ大虐殺」を正当化し、植民地主義的収奪を看過する（PW 175）。すなわちこのエピソードは、植民地を獲得するにあたって、先住民たちに対してアンフェアな手を使うことを肯定する言説として機能する。植民地争奪においてこの種の議論が認められるのならば、おそらくすべての帝国主義的侵略が正当化されるであろう。プラトンの『国家』でトラシマコスが述べるがごとく、正義とは強者の利益に他ならないことをこの場面は想起させる。

## II. 帝国とヴィクトリア・ノスタルジーの崩壊

しかしながらこのテキストは、当時の支配階級にとって単に都合の良いプロパガンダとしてのみ機能しているわけではない。支配階級に夢と希望を与えるファンタジーとして機能する一方、上流階級の支えた植民地政策や、ヴィクトリア時代の中産階級が理想とした価値観の崩壊も暗示している。物語の冒頭でダーリング氏と夫人の結婚に至るいきさつが語られる場面で、いわば処女地としてのダーリング夫人の植民地化の失敗を示唆する場面は、イギリスの植民地政策の挫折と、家庭内における父権の失墜とを同時に暗示している。

イギリスの帝国主義の行き詰まりを象徴的に表しているのがフックである。フェアプレイの精神を身につけ、愛国心にあふれ、勇敢に戦うピーター・パンと迷子たちに対して、その敵として登場するフックは対照的な存在として描かれている。彼は伝説的と言ってよい海賊である——エドワード・ティーチ、通称「黒ひげ」のかつての水夫長であり、また『宝島』に登場するロング・ジョン・シルヴァーが唯一恐れた男である。しかしフックとピーターの相違はその立場や立ち振る舞いだけではない。彼らの出自も対照的なのである。フック改めキャプテン・ジェイムズ・フックは、英国上流階級の出身である。

自分の部下である犬どもに囲まれているときほど、この謎めいた男が孤独を感じることはありませんでした。彼と比べれば、部下たちはそれほど社会的身分が卑しかったのです。

フックというのは彼の本名ではありません。彼が本当は誰であるかということ暴露すれば、今日でさえ国じゅうが騒然となるでしょう。……彼はある有名なパブリック・スクールに通っていました。そしてその伝統は今なお衣服のように彼にしっかりと纏わりついています……。それゆえ、この船を乗っ取ったときと同じ服装で船に乗っていることに、彼は今でも嫌悪感を抱いていました。そして歩くときはその学校で有名だった猫背に今だにこだわり続けていました。しかし彼は、何よりも正しい作法への情熱を捨てることはありませんでした。（PW 188, 傍点引用者；図2）

フックはイートン校出身であり、海賊となった今も当時のことを忘れない。<sup>10)</sup> そして彼のこだわる「正しい作法」とはすなわちフェアプレイの精神に他ならない。つまりフックこそ、愛国心を身につけ、英国社会を背負って立つための教育を受けた人物なのである。しかし彼は人生のどこかで出世への道を踏み誤った。おそらく植民地で出世しようと英国を離れ、時の運か本人のせいかわからぬ道を踏み外し海賊へと身をやつしたのであろう。<sup>11)</sup> 海賊となった後も彼を苦しめ続けるのは、自分がフェアプレイの精神を身につけることができず、ピーター・パンがやすやすとそれを実践していることである。フックの願いはピーター・パンをやっつけることよりもむしろ、ピーターが無作法な行為をするようにしむけたいというものに変わっていき、その思いが叶ったところで、彼は力つきて死ぬ。そのとき彼は、迷子たちから蔑まれ、自己嫌悪に苛まれた今の変り果てた姿からは想像できない、夢と希望に満ちていたイートン校時代の自分の姿を思い出し、死んでいく。この悲哀に満ちた場面は、後半のクライマックスの一つである。

どのような作法をフック自身は見せたでしょうか。誤った道を歩んできたフックではありましたが、嬉しいことに……最後の最後には、自分の一族の伝統に忠実でした。ほかの少年たちは彼の周囲を飛び回り、彼をあざけり、ののしていました。デッキの上で子どもたちに向かって力なく剣を振るっていたフックの心は、もはやうわの空でした。彼の心の中は、ずっと





図2 フック船長。アン・グレアム・ジョンストン画、『ピーター・パンとウェンディ』（1988年）より。

昔、運動場を猫背で歩いていたときのこと、表彰されるために校長室に呼ばれたときのこと、有名な塀の上に座ってフットボールの応援をしていたときのことでした。きれいに磨いた靴を履き、学生らしいベストを着て、ネクタイもきちっと締め、真新しい靴下をはいている自分の姿でした。

ジェームズ・フック、完全なる悪役とは言い切れない男、さらば。(PW 203-04)

本来ならば英国の帝国主義を牽引すべき教育を受けた上流階級のフックは、「人種退化 (degeneration)」した存在として提示される。「どれほど堕落 [degenerated] しようとも、これ [正しい作法]こそが本当に大切なものだ」とフックは知っていたのでした」(PW 188)。このように、フックは落ちぶれていく上流階級のメタファとして描かれ、英国の帝国主義のみならず社会の暗い先行きを予感させる人物なのである。

ダーリング家のコミカルな生活に暗示されているのは、中産階級の凋落である。ダーリング氏は金融街で働くビジネスマンであり、古典の素養もある中産階級であるが、<sup>12)</sup>先に述べたように一家の経済状態はかなり逼迫している。しかし陰りが見えているのはその経済状態だけではない。ヴィクトリア時代に中産階級の抱いていたイデオロギーは、家庭の天使としての母親像および家父長的ヒエラルキーに君臨する父親像である。ヴィクトリア時代を代表する詩人で帝国主義にも肯定的だったテニソンの『王女』(1847)は、今でいうフェミニスト的な考えを持っていた王女が最終的には隣国の王子の求愛を受け入れるという内容で、当時の流行や思潮が盛り込まれている長編連詩であるが、王子の父親の言葉に家父長社会の伝統的な男女観の一端が垣間見える。

男は戦いの場へ、女は暖炉の傍らへ  
男は剣をとり、女は針をとる  
男は知性、女はこころ  
男は命じ、女は従う  
さもなくば、混乱のみ。

(Tennyson 182)

ダーリング夫人は確かに子ども思いの母親ではある。しかし意図的ではないにしても、テキストの冒頭に入れ子の比喻で描かれているように、彼女は自分の夫に心の深奥を見せない。また家計簿のエピソードを通して彼女が家事に疎いこと、ダーリング氏とは対照的に経済観念にいい加減なことが明らかになる。「ダーリング夫人は白い衣装を着て結婚し、初めは家計簿も、遊びのようにほとんど大喜びで完璧につけていました。……しかしだんだんとカリフラワーを書き落とすようになり、代わりに目鼻のないお人形たちの絵が描かれるようになりました。計算をす

べきときに絵を描いていたのです」(PW 70)。このように「夢見がちな心を持ち、とても魅惑的で人をからかうような唇をした」ダーリング夫人は、ヴィクトリア朝の中産階級が理想とした家庭を守るべき天使像とは乖離している (PW 69)。<sup>13)</sup>

ダーリング氏には「自分に尊敬の念を抱かせようとする性質」があり、ことあるごとに家庭内で権威を誇示しようとするものの、ことごとく失敗する (PW 86)。冒頭の場面で、子どもと同時に自分も苦い薬を飲むと言いながらごまかして飲まなかったときには、子どもたちの「父親を尊敬していないかのよう」な冷たい視線を浴びる (PW 84)。また子どもたちからだけでなく、召使い／犬のナナからも尊敬されていない。「ナナが自分を尊敬していないのではないか」という思いを彼はときどき抱きました。『あなた、ナナはあなたのことをとって尊敬しているわよ』とダーリング夫人は夫を安心させ、父親に特別に親切にするよう子どもたちに合図したものです」(PW 72)。また物語の終わり近くでネバーランドの迷子たちを養子にすることに決める場面でも、自分にそのことを相談してもらえなかったことで拗ねてしまう。ダーリング氏は家庭で父親としての威厳を発揮することができない。

しかしなんといっても究極的なのは、子どもたちがピーター・パンに連れられていってしまった責任が自分にあると考えたダーリング氏のとった行動である。彼は自分には犬小屋がふさわしいと考え、周囲の好奇の目に耐え忍びながらも、そこを終生の住処と決める。

子どもたちが飛んでいってしまうと、ナナを鎖で縛ったりしたことの責任はすべて自分にあるとダーリング氏は骨身に沁みて思いました……。そして子どもたちが飛んでいった後、このことについてよくよく考えたすえ、四つん這いになって犬小屋のなかにもぐり込みました。出ていらしてとダーリング夫人が優しい声で何度呼んでも、氏は悲しげに、しかしきっぱりと、こう答えるのでした。

「いいや、妻よ、わたしにはここが相応しいのだ。」……

犬小屋は毎朝ダーリング氏を中に入れたまま馬車まで運ばれ、そして会社まで運ばれていきました。そして六時には同じようにして帰宅し



*In the bitterness of his remorse he swore that he would never leave the kennel until his children came back.*

図3 「激しい自責の念にかられ、ダーリング氏は、子どもたちが帰ってくるまで自分は決して犬小屋を離れないと誓いました。」メイベル・ルーシー・アトウェル画、『ピーター・パンとウェンディ』(1921年)より。

ました。……心の中では辛い責め苦に遭っていたに違いありません。しかし彼は平静を装っていました。……中を覗く女性がいると、必ず帽子を取って挨拶しました。

……やがてそうしている理由が知られるようになり、人々の心は感動に打たれました。大勢の人々が馬車の後ろをついて歩き、喝采の声を上げました。サインをもらおうと、可愛らしい女の子たちが馬車によじ登ってきました。インタビューが全国紙に掲載されました。社交界は彼をパーティーに招待し、招待状には「是非犬小屋でいらしてください」と書き添えられました。(PW 208-09; 図3)

ここに至って父親の権威も地に落ちた感がある。<sup>14)</sup>ブルームズベリーに住むこの一家の生活が暗示しているのは、中産階級の物質面の没落だけでなく、家庭の天使たるべき母親像と家父長制というブルジョア・イデオロギーの崩壊である。

「偉大な白人の父」ピーター・パンが率いるネバーランドは、このような現実世界の不安や危機とは無縁の理想郷であるかのように見える。<sup>15)</sup>ピーターは帝国の支配者として君臨し、また家長として迷子たちとの一家を統率する。帝国としてのネ

バーランドの秩序は、住民たちのコミカルな円環運動で比喩的に表現されている。

この晩、島の主な軍勢は次のように配置されていました。迷い子たちはピーターを探しに出かけ、海賊たちは迷い子たちを探しに出かけ、インディアンたちは海賊たちを探しに出かけ、獣たちはインディアンたちを探しに出かけていました。彼らは皆島じゅうをぐるぐる回っていましたが、出会うことはありませんでした。皆同じ早さで進んでいたのです。(PW 112)

ピーターは、不在でありながらいわば浮遊するシンフィアンとして帝国を支配し、その秩序を維持している。

しかしながらこの帝国の未来も安寧ではない。少年たちが、ピーター不在の間に彼から禁じられた行為——母親の話をする——に没頭し、この均衡状態も瓦解してしまう。彼らは海賊たちに見つけられ、住処を突き止められる。無限の円環はあっけなく崩壊し、帝国の秩序は崩れ去る。

ピーター・パンとその仲間たちがネバーランドで形作る一家には、ロンドンのダーリング家を悩ませている経済的心配がない。母親として肅々と家事に勤しむウェンディは、ヴィクトリア朝が理想とした、典型的な家庭を守る天使の姿であるように見える。またピーターも、植民地に対して厳格に適応している規律を家庭内に持ち込み、父親としての絶対的権威を保っているように見える。「実はウェンディは子どもたちに少し同情していました。しかし家庭を守る妻としての役割に完璧なまでに忠実だった彼女は、父親に対する不平には決して耳を傾けませんでした。自分の意見がどうであれ、『お父さんが一番よく知っているのよ』といつも言っていました」(PW 157-58)。ピーター・パンとその仲間たちは、一見ヴィクトリア朝の中産階級が理想とした家庭を築いている。

しかしこの家庭にもほころびの予兆が忍び寄っている。ピーターは、ダーリング氏同様、ことあるごとに自分に尊敬の念を抱かせようとする。しかし家庭内におけるピーター・パンの絶対的権威は常に転覆の危機に瀕している。

「お父さんの椅子に座っていい？ 今いない

し。」

「父さんのイスに座るなんて、ジョン、あなたなんてこと言うの！」ウェンディはショックを受けました。「だめに決まってるでしょ。」

「本当はぼくたちのお父さんじゃないんだろ」ジョンは答えました。「ぼくが教えてやるまで、お父さんてどんなことするのかも知らなかったんだから。」(PW 159)

さらにピーターの妻としてのウェンディの地位はティンカー・ベルによって常に横槍が入れられる。そのうえピーターは時として父親としての役割を突如放棄しようとし、ウェンディが自分の妻になることにも関心がなくなる。ピーターが真に望んでいることはウェンディが自分の母親になることであり、ウェンディの望みとは裏腹に、彼女に対して女性としての魅力を感じることは一切ない。結局は彼らも、ヴィクトリア朝のブルジョア的視点からみた「しあわせな家庭」を演じ、演じさせられているに過ぎない。

「ウェンディ、ぼくもうおっきいから揺りかごになんか入れないよ」とマイケルは文句を言いました。

「だれかが揺りかごに入ってなきゃならないの」ウェンディは取り付く島もなく答えました。

「そしてあなたが一番小さいでしょ。揺りかごは家にあるととっても家庭的な感じがするものなの。」(PW 160)

このように、ピーターと子どもたちの「家庭」は、常にその破綻の危機をはらみ、各人は家族としての役割を演じ、外見上の体裁を繕っているにすぎない。これは現実の世界、つまりダーリング家でおこなわれていることと大同小異である——「しあわせな家庭」たるべく（犬ではあるが）乳母をつけ、一人しかいない使用人を複数形で呼び、居間があるふりをし、そして父親の威厳を保とうとする。以上のように、一見中産階級の現実逃避的理想像を描いているかに見えるネバーランドも現実世界とパラレルなのであり、そこにも帝国の崩壊とヴィクトリア朝的ブルジョア・イデオロギーの破綻の予兆が見え隠れしている。「偉大な白人の父」と自らを呼ばせるピーター・パンが君臨するもののほころびの見え隠れす

るネバーランドは、「偉大な白人の母」と呼ばれたヴィクトリア女王亡き後ばかりと空いたその空虚な穴に求心力を失っていく英国社会を映し出しているかのようである。

## 結 語

物語の冒頭、庭で摘んだ花を見せようと駆けよってきた幼いウェンディを見て、ダーリング夫人は胸に手を当てて叫ぶ、『「ああ、どうしてずっとこのままでいてくれないのかしら』(PW69)。庭、花、子どもというヴィクトリア朝の理想的「しあわせな家庭」像のなかで繰り返されるこの場面には、進歩・発展のない繰り返しや現状維持を望み、変化を恐れる夫人の心のうちが透けて見える。しかしこれはテキスト全体に通底するトーンである。ネバーランドでは住人たちが敵を捜しながら同じ速度で巡回する。迷い子たちは地下の家に生えてくる木を毎日切りテーブルとする——「ネバーツリーは家の真ん中を突っ切って必死に成長しようとしていました。しかし毎朝子どもたちは地面と平行にその幹を切ってしまうました」(PW134)。彼らは地下の家へ降りる木の穴の大きさに自分を合わせるために、断食までして成長を止め、成長しないことによって家庭の幸せを保とうとする——「いったん大きさが合うと、合わなくなることはないよう多大な努力が必要とされます。そしてウェンディは気づいて喜んだのですが、こうしていることで、家族全体が完璧な状態であることができるのです」(PW133)。

ここに見られる、黄金時代を失うことへの恐怖感、変化に対する嫌悪感、当時の英国社会のエートスを映しだしており、これが帝国主義を肯定するナショナリズムを生み出していった。しかし変化は着実に進み、ダーリング家においても、ネバーランドでも、以前の生活様式は崩れ去り、かつての繁栄と安定は、フックの場合同様、過去へのノスタルジーでしかなくなってしまう。過去の生活様式にこだわるダーリング家の生活は——そして彼らが象徴する20世紀初頭の英国中産階級の生活は——ヴィクトリア時代の影を引きずりながらも、そこから引きはがされてしまう。そしてその影は、ピーター・パンの影とは異なり、再び元に戻ることはないのである。

以上のように『ピーターとウェンディ』には、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリスをめぐる

社会情勢、つまり外には植民地獲得競争、内には貧困と人種退化という問題を抱えながら帝国主義に活路を見出そうとしていた時代状況が色濃く刻印されている。このテキストは当時の教育が植えつけようとしていたフェアプレイの精神、愛国心などに繰り返し言及し、また白人の先住民支配のステレオタイプを描くことで、帝国主義を支える非常に強力なプロパガンダとしての側面を持っている。しかしそこに同時に描かれているものは、フックの墮落に象徴される、イギリス上流階級の退廃と彼らが担うべき植民地政策の暗い行く末であり、そして古き良きヴィクトリア時代の価値観やヒエラルキーがもはや機能しなくなりつつある英国社会の姿なのである。

本研究は、2005年度熊本保健科学大学特別研究費の助成を受けたものである。

## 註

- 1) 後述のようにピーター・パンが登場する作品は複数あるが、本論で分析の対象とするのは、1911年に出版された小説『ピーターとウェンディ』である。テキストとしてJ. M. Barrie, *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*, ed. Peter Hollindale (New York: Oxford UP, 1991) を用いる。引用はすべてこの版からとし、括弧内にPWに続いてページ数を記す。本文中の訳は拙訳である。
- 2) 精神分析的手法による読解では、しばしば作者と主人公を同一視し、作者や登場人物たちが「健全な」発達を阻む障害を抱えていることなどを論じる。Skinner 111-41, Grotjahn 143-48, Meisel 545-63, Pollock 454-64参照。テキスト分析としてより有効なものはGeduld, エディプス・コンプレックスという点からの分析はEgan 49-54, Rose 35参照。またユング心理学を応用し分析したものにYeoman, 特に81-155がある。これらに対し、精神分析的手法に対する批判的考察はJack 155-81。またZipesは精神分析批評と歴史主義批評を結びつけることを提唱している(141-43)。ちなみに、「ピーター・パン・シンドローム」という有名なタームを広めたのはDan Kiley, *The Peter Pan Syndrome: Men Who Have Never Grown*

*Up* (New York: Dodd and Mead, 1983) であるが、これはもちろんテキストの分析が主なテーマではない。

- 3) 例えば Carpenter は次のように論じている。「ピーター・パンの第一のモデルは、もちろん、バリー本人である。ピーターとは、バリーがそうであったもの、そうなったもののすべてである」(177)。しかしこのような安易な同一視に対して、1918年から断続的に(速記もタイプもできなかったにもかかわらず)バリーの秘書を務めたシンシア・アスキスは苦言を呈している。「バリー自身が『成長しようとしないう少年』という神話のインスピレーションの源だったといった考えに同意するようになりましたか[といったような質問をよく受けた]。そのように思ったことは一瞬たりともありません!彼の顔は、いつ見ても、これまで出会ったなかでもっとも大人びていて、もっとも経験を積んでいるように見え、印象深いものでした。六歳の時の例の写真……を見るたびに、ピーター・パンの作者は、成長が止まったのではなく、他人以上に早く成長したのだ、という自分の考えが正しかったのだとの確信を持ちました」(51)。
- 4) ピーター・パンのテキストを当時の文脈において解釈しようという試みも近年いくつか見られる。例えば、少年が永遠の若さや美の象徴として社会現象になった1880年から20世紀初頭にかけての状況の中にこのテキストを位置づけようとするもの(Wullschläger 109-18)、ヴィクトリア朝末期から20世紀初頭にかけての子どもの理想化、妖精の流行といった時代背景を論ずるもの(Avery 173-85)、近代化がもたらした階級やジェンダーに関する新しい概念によって中産階級の間を広まった不安、ことに男性のアイデンティティの変化によって生じた不安を『ピーター・パン』は体現しているとするもの(Wilson 595-96)などがある。
- 5) 富山『ホームズの世紀末』, 289-306参照。
- 6) この戦いの後、シャーロック・ホームズはハルトゥームに単身で乗り込み、そこで得た情報を英国外務省に送っていたという設定になっている(Doyle 12)。そのかいあってか(?)1898年にキッチナー率いる英国軍はスーダンの征服に成功した。
- 7) 19世紀末から20世紀初頭の時代状況、パブリック・スクールをめぐる言説、およびスポーツ・フェアプレイの精神-愛国主義のイメージの連鎖に関しては、Hynes 21-34, 54-73, Mack 177-264, Rutherford 11-38, Wilkinson 68-90, 富山, 前掲書, 191-211参照。
- 8) 富山氏は「閉じる、閉じない」のなかで、ネバーランドには植民地のイメージが重ねられており、「作者の想像力のなかでは……おそらくカリブ海のどこかに設定されているのであろう」と述べている(48)。一方Yeomanは、文学で「来世」のメタファとして使われてきた一連の想像上の国々がネバーランドを形成しているといい、その大きな要素にケルトの神話を挙げている(103-07, 132-33)。
- 9) ただし第一次大戦に英国が参戦し1年以上たった1915年のクリスマス・シーズンの公演では、この台詞はあまりに露骨すぎるとしてカットされた。Birkin 252参照。
- 10) 後のバリー自身の「調査」によれば、イートン時代のフックはクリケット部員であり、また有名な社交クラブ「ポップ」にも所属していた。その後オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ在籍(卒業したかどうかは不明)。在学中は大量の本を読みあさったが、そのすべてが詩で、とくにロマン派のものが多かったとされる。(1927年7月7日、イートン校での講演より。Barrie, "Captain Hook at Eton" 所収。)またフックの一味には、かつてパブリック・スクールの助教師をしていたスターキーもいる。ちなみにステイーブンスンの『宝島』に登場する海賊の親玉、L・J・シルヴァーも「あの男、バーベキューはただもんじゃありませんぜ。……若い頃にはちゃんとした学校へ通って、今でも本のようにしゃべれますぜ……」と言われるが、身分、教育ともフックの比ではないだろう(Stevenson 54)。
- 11) バリーの戯曲『あっぱれクライトン』には、家族と召使いを引き連れて海を渡る「男やもめで博愛主義者で進歩的な思想を抱いた貴族」ローム卿が登場する(Plays 349)。
- 12) Wilsonなどがダーリング家の中産階級として一方、R. D. S. Jackは、ダーリング家は「自分たちより上の階級のまねをしている労働

者階級」(179)であると述べている。

- 13) バリー作品には、ダーリング夫人や『メアリ・ローズ』の主人公のように、妖精の世界を直感的に理解したり、死後の世界と交信する力を持った女性たちがしばしば登場する。
- 14) ダーリング氏の疎外は戯曲『ピーター・パン』によりはっきり現れており、Wilsonはこの点を資本主義の発達と関係づけて論じている(597-602)。
- 15) Wilsonはネバーランドについて、科学技術の発達、帝国の終焉といった近代社会のなかで中産階級が抱いた不安から逃避するための、過去の安定したノスタルジックな空間として機能するとしている(595-610)。

#### Works Cited

- Asquith, Cynthia. *Portrait of Barrie*. London: James Barrie, 1954.
- Avery, Gillian. "The Cult of Peter Pan." *Word & Image* 2.2 (1986): 173-85.
- Barrie, J. M. "Captain Hook at Eton." *M'connachie and J. M. B.: Speeches by J. M. Barrie*. London: Peter Davies, 1938. 115-29.
- . *The Definitive Edition of the Plays of J. M. Barrie*. Ed. A. E. Wilson. London: Hodder and Stoughton, 1942. [Plays]
- . *The Little White Bird*. London: Hodder and Stoughton, 1902. [LWB]
- . *Peter Pan and Wendy*. Illus. Mabel Lucie Attwell. London: Hodder and Stoughton, 1921.
- . *Peter Pan and Wendy*. Illus. Anne Grahame Johnstone. London: Award, 1988.
- . *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*. Ed. Peter Hollindale. New York: Oxford UP, 1991. [PW]
- Birkin, Andrew. *J. M. Barrie and the Lost Boys*. New Haven: Yale UP, 2003.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature*. Boston: Houghton Mifflin, 1985.
- Doyle, Arthur Conan. *The Return of Sherlock Holmes*. Ed. Richard Lancelyn Green. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Egan, Michael. "The Neverland of Id: Barrie, *Peter Pan*, and Freud." *Children's Literature* 10 (1982): 37-55.
- Geduld, Harry M. *Sir James Barrie*. New York: Twayne, 1971.
- Grotjahn, Martin. "The Defenses against Creative Anxiety in the Life and Work of James Barrie." *American Imago* 14 (1957): 143-48.
- Hynes, Samuel. *The Edwardian Turn of Mind*. Princeton: Princeton UP, 1968.
- Jack, R. D. S. *The Road to the Never Land: A Reassessment of J M Barrie's Dramatic Art*. Aberdeen: Aberdeen UP, 1991.
- Kiley, Dan. *The Peter Pan Syndrome: Men Who Have Never Grown Up*. New York: Dodd and Mead, 1983.
- Mack, Edward C. *Public Schools and British Opinion since 1860: The Relationship between Contemporary Ideas and the Evolution of an English Institution*. 1941. Connecticut: Greenwood, 1971.
- Meisel, Frederick L. "The Myth of Peter Pan." *The Psychoanalytic Study of the Child* 32 (1977): 545-63.
- Papillon, T. L. "The Public Schools and Citizenship." *The Public Schools from Within*. London: Low and Marston, 1906.
- Pollock, George H. "On Siblings, Childhood Sibling Loss, and Creativity." *Annual of Psychoanalysis* 6 (1978): 443-81.
- Rose, Jacqueline. *The Case of Peter Pan or the Impossibility of Children's Fiction*. 1984. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1993.
- Rutherford, Jonathan. *Forever England*. London: Lawrence & Wishart, 1997.
- Sackville-West, Vita. "Outdoor Life." *The Character of England*. Ed. Ernest Barker. Oxford: Clarendon, 1947. 408-24.
- Skinner, John. "James M. Barrie or the Boy Who Wouldn't Grow Up." *American Imago* 14 (1957): 111-41.
- Stevenson, Robert Louis. *Treasure Island*. Ed. Emma Letley. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Tennyson, Alfred. *Tennyson's Poetry*:

- Authoritative Texts, Contexts, Criticism*. Ed. Robert W. Hill Jr. New York: Norton, 1999.
- Weldon, J. E. C. "The Imperial Aspects of Education." *Proceedings of the Royal Colonial Institute* 26 (1894-95): 322-46.
- Wilkinson, Glenn R. *Depictions and Images of War in Edwardian Newspapers, 1899-1914*. Basingstoke: Macmillan, 2003.
- Wilson, Ann. "Hauntings: Anxiety, Technology, and Gender in *Peter Pan*." *Modern Drama* 43.4 (2000): 595-610.
- Wullschläger, Jackie. *Inventing Wonderland: The Lives and Fantasies of Lewis Carroll, Edward Lear, J. M. Barrie, Kenneth Grahame and A. A. Milne*. London: Methuen, 1995.
- Yeoman, Ann. *Now or Neverland: Peter Pan and the Myth of Eternal Youth*. Toronto: Inner City, 1998.
- Zipes, Jack. "Negating History and Male Fantasies through Psychoanalytic Criticism." *Children's Literature* 18 (1990): 141-43.
- 富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』, 青土社, 1993.
- 「閉じる, 閉じない— (ポスト) モダニズムと大英帝国」, 『岩波講座文学12 モダンとポストモダン』, 岩波書店, 2003.  
(平成18年1月16日受理)
- 岩井 学  
〒861-5598 熊本市和泉町325番地  
熊本保健科学大学  
保健科学部 衛生技術学科  
iwai@kumamoto-hsu.ac.jp

Fair Play / War / Peter Pan:  
The Decline and Fall of The British Empire  
and Bourgeois Ideology

Gaku IWAI

**Abstract**

Peter Pan always behaves on the principle of being fair. The spirit of fair play was, however, not monopolized by this boy who would not grow up; it widely circulated among British society at the beginning of the twentieth century. This is because at the time of the decline of the British Empire, the spirit of fair play was exploited to boost patriotism and the ideology that supported imperial wars. Although Peter Pan has often been regarded as a kind of archetype of eternal youth, and has been analyzed from psychoanalytic or psychological point of views, the text *Peter and Wendy* reflects the *ethos* of the period at the turn of the century. In this essay I shall analyze the text from the point of view of the time the text was produced, referring to the anxiety embraced by the upper and middle classes who witnessed the decline of the Empire, to the patriotic ideology produced and fueled by their feelings of fear, and to the contemporary educational systems that contributed to the circulation of the ideology. These analyses will reveal the meaning of creating Peter Pan and the Lost Boys at the beginning of the twentieth century, and how the feelings of anxiety held by the contemporary British people are reflected in the text.

Key words: Peter Pan, J. M. Barrie, British Empire, imperialism, spirit of fair play